講演要旨にかえて

校舎の匂い

大鶴　義丹

駒沢の校舎に入るや、鼻先を冬の風が過ぎていった。風に混じったかすかな匂いに、ふと、十年以上も前に日本大学文芸学部を江古田で過ごした大学時代の時間が鮮明な色を取り戻す。

それは大学施設特有の匂いだ。どんな匂いかというと、おそらく大多数の若者たちの体臭とコンクリートの匂いが混じり合ったときにできるある種の悪臭に近いものかもしれない。

これと同じように、小学校の施設は小学校の匂いがあり、中学校施設には中学のものが、また、高校施設のものは高校のものがと、それぞれハッキリと異なる悪臭があるからおもしろい。

その違いがどういった化学的システムの違いにより別個なのかという考察は、文学かぶれからの心理的な要因が大分関わっていそうなので、ズルして省かせて貰うが、普段社会人が滅多に見ることのない大学校舎独特の色合いや、学食の裏から立ちのぼる湯気などの光景が懐かしさを呼び戻すのだろう。

「当時、自分の中で機能していた本質的なものは何だったのか」

この手の内省は過去に自分が経験した場所と共通項を持つ「場」に訪れたとき特有の感情だ。自分も駒沢の校舎や教室を見たり触ったりしながら、大学時代、自分の中で機能していた本質的なものとは何だったのだろうと思った。今に通じる自分の機能の原風景が駒沢の校舎のどこかにもある予感がした。

拙い講演の最中、今回対峙させていただいた生徒たちの表情、服装、細やかな反応や向けられた質問な

どから、当時の自分の中で機能していたものが少しずつ言葉という装置にしていく。

そして最もそれがハッキリとしたのは、学生たちから「大人」としての自分に向けられる「異邦人」の視線であった。

当時も自分も同じ視線で「大人」たちを見つめた。この「不安」はいつなくなるのだろうか、また、それを有していない「大人」は敵とさえ思えた。

あんな不安とよく同居していられたものだなと、当時の自分が誇らしく思えるような度合いの不安だ。出口や完成形、すごろくでいうアガリも分からずに、果てしないゲームを始めたようなものである。そう考えると、当時の自分がとても「勇ましい」存在にさえ思えてくる。「勇ましさ」だけを頼りにすべてが解決できると信じていた。

そして学生生活に終わりがあると気がつき始めたころに同時に「勇ましさ」も永遠ではないと気がつく。それはすなわち「不安」の果てしない巨大化でもあり、その恐怖から逃れるために、「不安」を消化する装置を作らねばと気がついた。

大して授業も出ていなかったが、それができた自分というのはある種の優等生かもしれないと、今更ながらに思った。だが、今だからこそ、それが大学で最も得るべきものの一つだということもよく分かる。

生徒たちに直接は言えなかったことがそこにある。沢山「不安」を手に入れなさい、それが大きければ大きいほどに、対抗としての「装置」も巨大になる。だから「不安」に身を焦がせばよい。

＊この講演要旨は、作家・俳優　大鶴義丹先生にご講演いただいたものを、先生のお手を煩わせて収めたものである。右の講演会は駒澤短期大学国文科主催にて、平成十三年十一月二十九日（木）午後一時からもたれた。

（編集部）